

ルツ記
聖徒伝 77

「あなたの神は わたしの神」

ルツ記1章 ナオミの悲哀・ルツの決意

アウトライン

- 0. イントロダクション
- I. モアブでの悲劇 1章
- II. ベツレヘムでの落ち穂拾い 2章
- III. まとめと適用

主の約束に生きる者となろう



「落ち穂拾い」 ミレー

【無垢の時代】
天地創造

【良心の時代】
墮罪
~大洪水

【人類統治の時代】
バベルの塔事件

【約束の時代】
アブラハム
~ヤコブ

【律法の時代】
イスラエル
王国時代
メシア初臨

【恵みの時代】
聖霊降臨
世界宣教
メシア再臨

【御国の時代】
千年王国
大審判
新天新地

①エデン契約

②アダム契約

③ノア契約

④アブラハム契約

⑤モーセ契約

⑥土地の契約

⑦ダビデ契約

⑧新しい契約

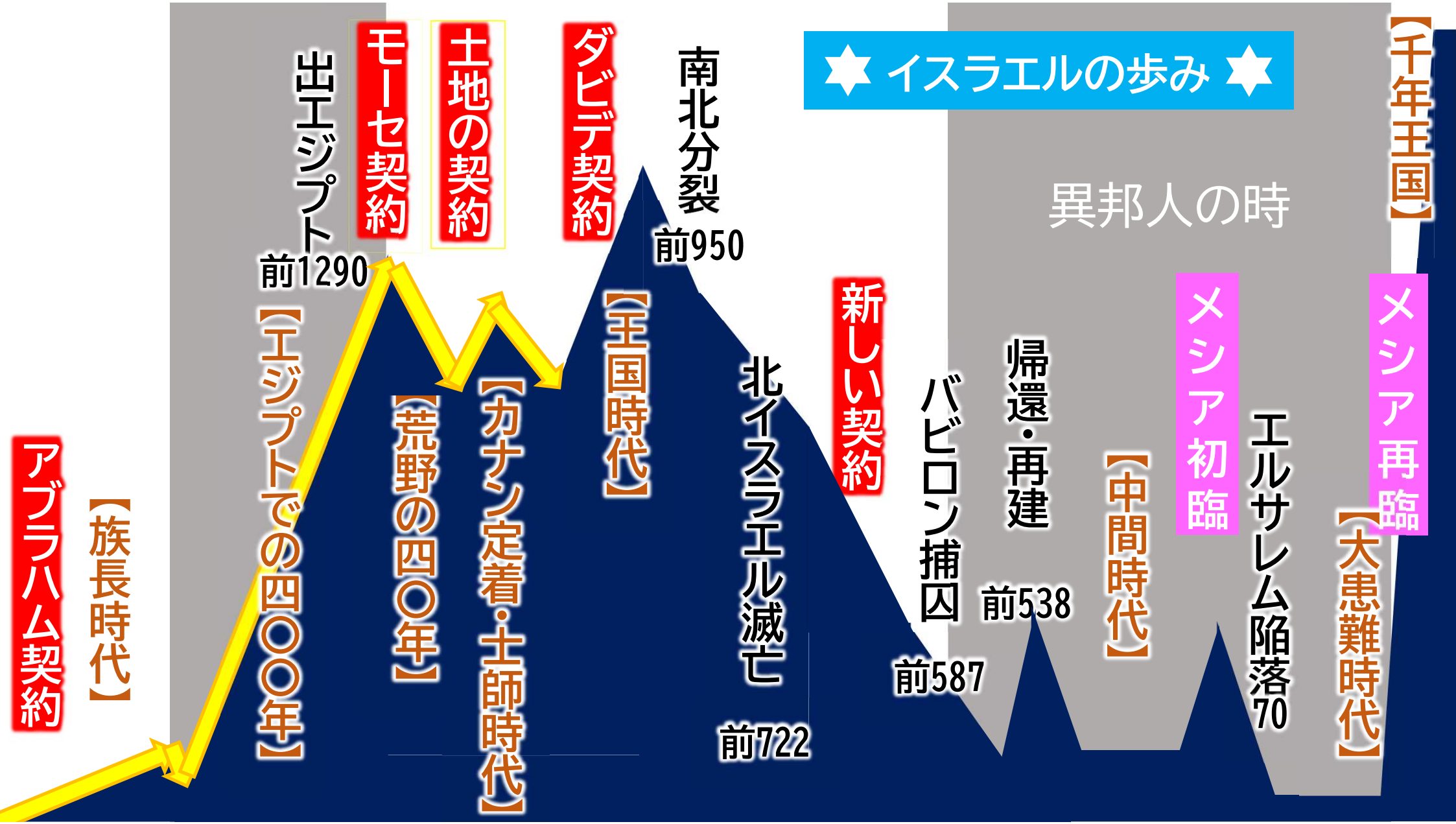
神の約束が、人類と世界の歴史を導く!!

過去

現在

未来

★ イスラエルの歩み ★



アブラハム契約

【族長時代】

出エジプト
前1290

【エジプトでの四〇〇年】

モーセ契約

【荒野の四〇年】

土地の契約

【カナン定着・士師時代】

ダビデ契約

【王国時代】

南北分裂
前950

北イスラエル滅亡

前722

新しい契約

バビロン捕囚

前587

帰還・再建

前538

【中間時代】

メシア初臨

エルサレム陥落70

【大患難時代】

メシア再臨

【千年王国】

異邦人の時

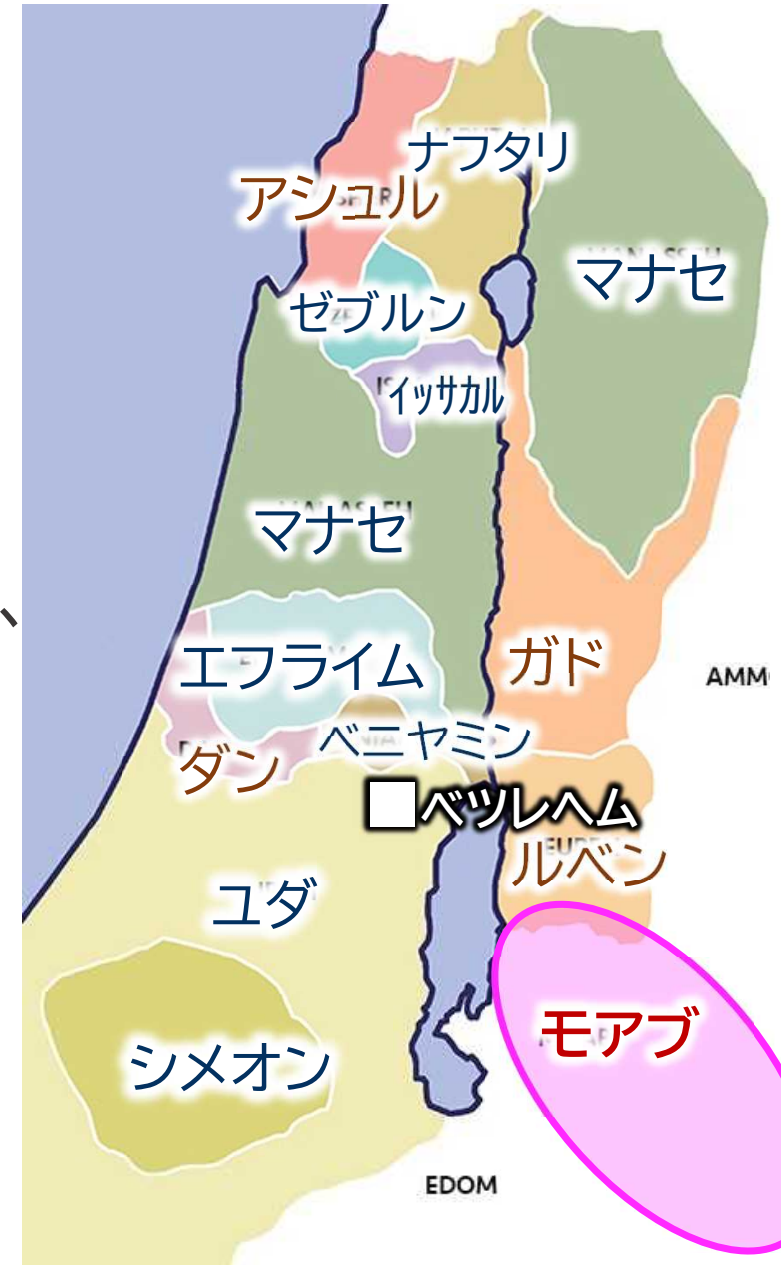
【ルツが生きた士師の時代】

- イスラエル12部族は、それぞれの相続地を手に入れたが、未征服も多く残っていた。
- カナン人の町が要所にあり、周囲にも強力な民族がいて、イスラエルを脅かしていた。
- イスラエルが背教し、異民族に苦しめられ、悔い改めて主に助けを求めると、主は、士師を立て、敵を撃退された。
- 士師は、あくまで一部族のリーダー。
全イスラエルを治める王は、まだいなかった。



【ルツが生きたのは士師の時代のいつ？】

- ヨシュアが最初に攻め取ったエリコで唯一、主に立ち返ったラハブは、サルマと結婚。
「サルマはボアズを生んだ(ルツ記4:21)」
- 士師の時代の初め頃、ロトの子孫モアブ人が、18年間、イスラエルを支配した。
➡ルツの時代はこの頃か？
- モアブ人ルツが、姑ナオミに聴き従い、メシアの系譜を継ぐに至る。それがルツ記。



【モアブ人とは？】

■ アブラハムの甥ロトと実の娘の子が始祖。

“その父による”が、モアブの語源。

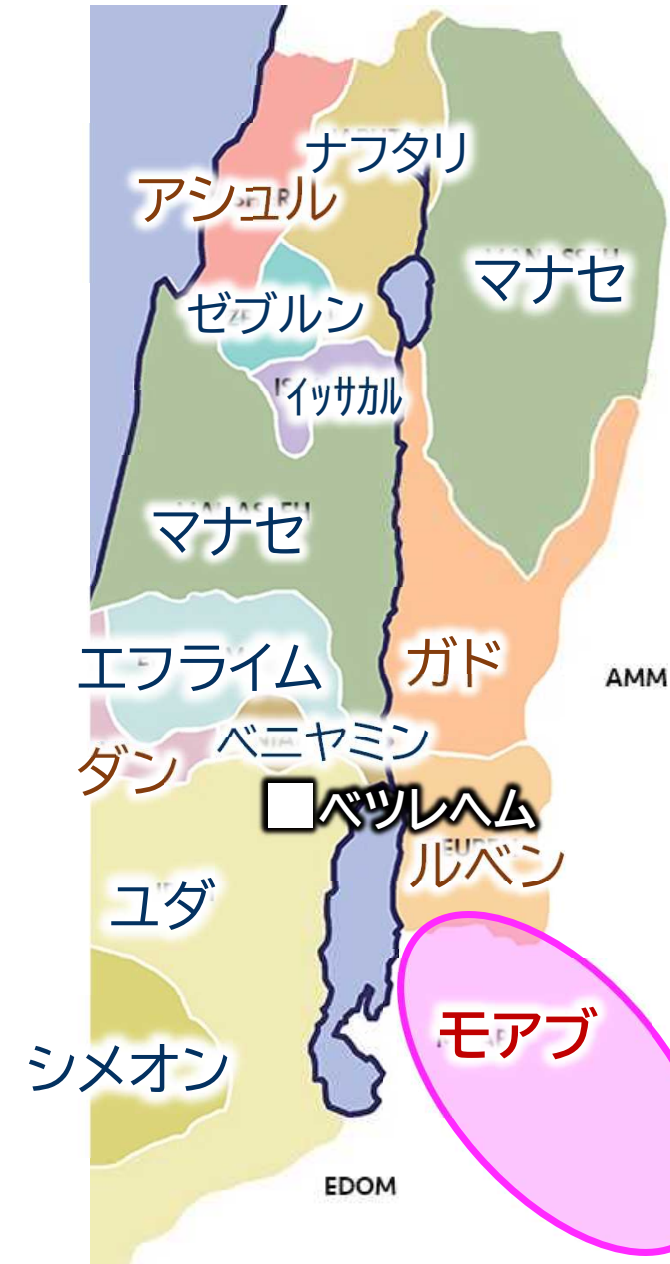
■ イスラエルが40年の放浪の最後に来た地がモアブ。

神は、モアブと戦うことを禁じた。

■ モーセ率いるイスラエルに淫行の罪を犯させ、
イスラエルは主の厳しい裁きを招いた。(民25章)

■ 主の会衆には加えるなと命じられた(申23:3)

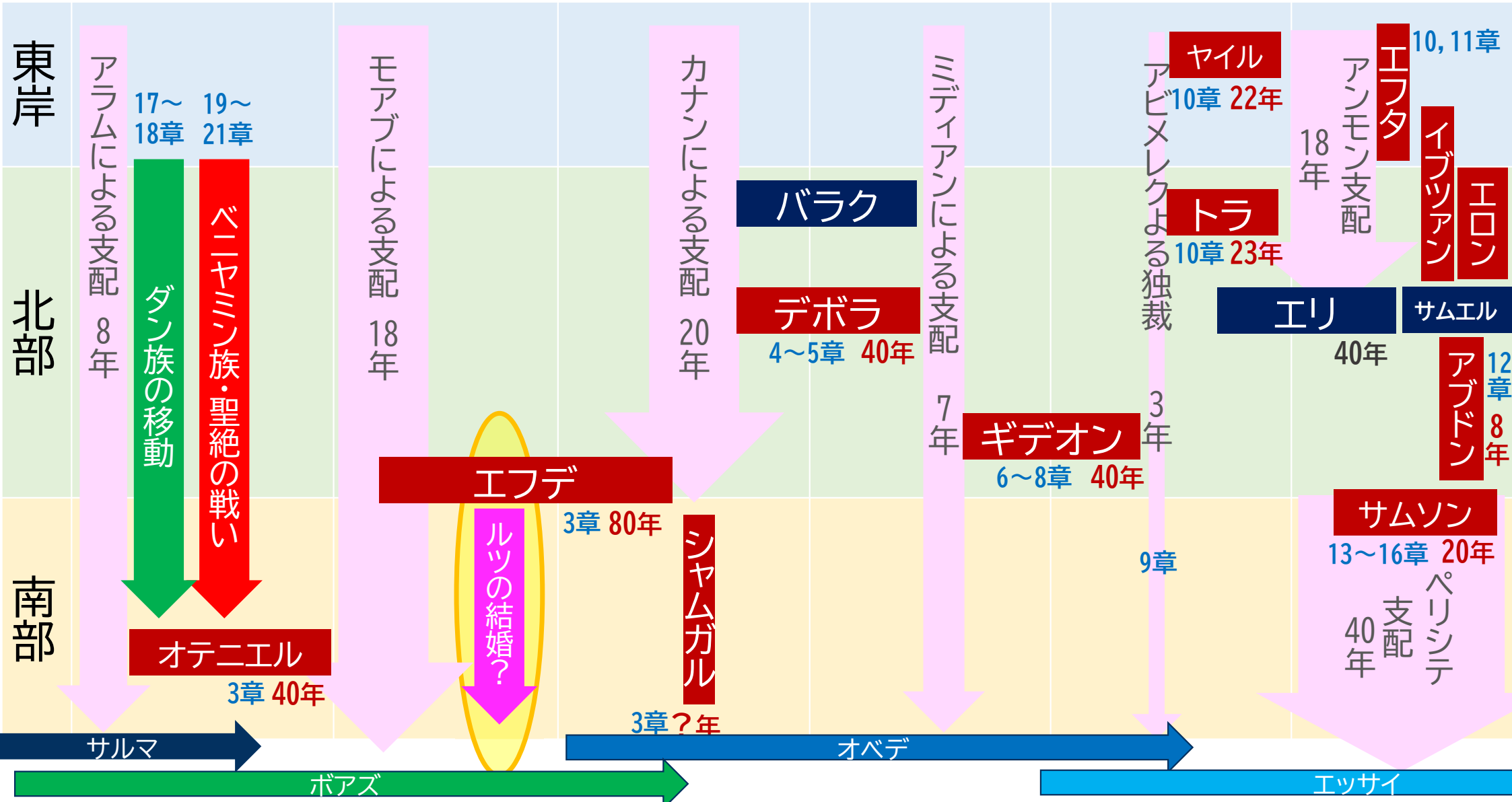
■ 性的・霊的淫乱の民とされ、神の厳しい裁きが、
度々預言されている。



【士師の時代】

BC1200

BC1100





I. モアブでの悲劇

ルツ記1章

モアブの穀倉地帯

【モアブへの移民となって】 ルツ1:1~2

さばきつかさが治めていたころ、この地に飢饉が起こった。そのため、ユダのベツレヘム出身のある人が妻と二人の息子を連れてモアブの野へ行き、そこに滞在することにした。その人の名は**エリメレク***、妻の名はナオミ、二人の息子の名は**マフロンとキルヨン***で、ユダのベツレヘム出身のエフラテ人であった。彼らはモアブの野へ行き、そこにとどまった。

*エリメレク ➡ “わたしの王は神”

*“切望する” と “思い焦がれる”

■飢饉は、イスラエルへの神の裁き。主を慕い求めながら、約束の地を離れた苦渋が伝わってくる。



【二人の嫁】 ルツ1:3~5

するとナオミの夫エリメレクは死に、彼女と二人の息子が後に残された。

二人の息子はモアブの女を妻に迎えた。一人の名は**オルパ***で、もう一人の名は**ルツ***であった。彼らは約十年の間そこに住んだ。

するとマフロンとキルヨンの二人もまた死に、ナオミは二人の息子と夫に先立たれて、後に残された。

*オルパ ➡ “ガゼル” カモシカ

*ルツ ➡ “友情”

■約束の地を離れれば祝福を失う ➡律法の原則



ガゼル

【故郷からの知らせ】 ルツ1:6~7

ナオミは嫁たちと連れ立って*、モアブの野から帰ることにした。【主】がご自分の民を顧みて*、彼らにパンを下さった、とモアブの地で聞いたからである。

彼女は二人の嫁と一緒に、今まで住んでいた場所を出て、ユダの地に戻るため帰途についた。

*当初は、一緒に帰るつもりだったのだろう。

*民は悔い改め、神の裁きの期間は終わった。



【惜別の言葉】 ルツ1:8~9

ナオミは二人の嫁に言った。「あなたたちは、それぞれ自分の母の家に帰りなさい。あなたたちが、亡くなった者たちと私にしてくれたように、【主】があなたたちに恵みを施してくださいますように。

また、【主】が、あなたたちがそれぞれ、新しい夫の家で安らかに暮らせるようにしてくださいますように。」そして二人に口づけしたので、彼女たちは声をあげて泣いた。

- エリメレクの家でいつも讃えられていた主の御名。二人の嫁も夫と両親によく仕えていたと分かる。



【ルツの促し】 ルツ1:10~13


二人はナオミに言った。「私たちは、あなたの民のところへ一緒に戻ります。」

ナオミは言った。「帰りなさい、娘たち。なぜ私と一緒にいこうとするのですか。私のお腹にまだ息子たちがいて、あなたたちの夫になるとでもいうのですか。

帰りなさい、娘たちよ。さあ行きなさい。私は年をとって、もう夫は持てません。たとえ私が自分に望みがあると思い、今晚にでも夫を持って、息子たちを産んだとしても、だからといって、あなたたちは息子たちが大きくなるまで待つというのですか。だからといって、夫を持たないままにいるというのですか。

娘たちよ、それはいけません。それは、あなたたちよりも、私にとってとても辛いことです。

【主】の御手が私に下ったのですから。」



辛い出来事の背後にも神の働きを認めるのが真の信仰者

【なおすがりつくルツ】 ルツ1:14~15

彼女たちはまた声をあげて泣いた。オルパは姑に別れの口づけをしたが、ルツは彼女にすがりついた。

ナオミは言った。「ご覧なさい。あなたの弟嫁は、**自分の民とその神々***のところに帰って行きました。あなたも弟嫁の後について帰りなさい。」

***アブラハムの子孫であるモアブだが、
長らく偶像礼拝の民だった。**



【ルツの信仰告白】 ルツ1:16～17

ルツは言った。「お母様を捨て、別れて帰るように、仕向けないでください。お母様が行かれるところに私も行き、住まれるところに私も住みます。あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です。

あなたが死なれるところで私も死に、そこに葬られます。もし、死によってでも、私があなたから離れるようなことがあったら、【主】が幾重にも私を罰してください。」

- *イスラエルの主を真の神と信じていたルツの信仰。
- 義母への愛も、ルツの信仰から生まれたもの。



【ナオミの帰還】 ルツ1:18～20

ナオミは、ルツが自分と一緒にいこうと固く決心しているのを見て、もうそれ以上は言わなかった。

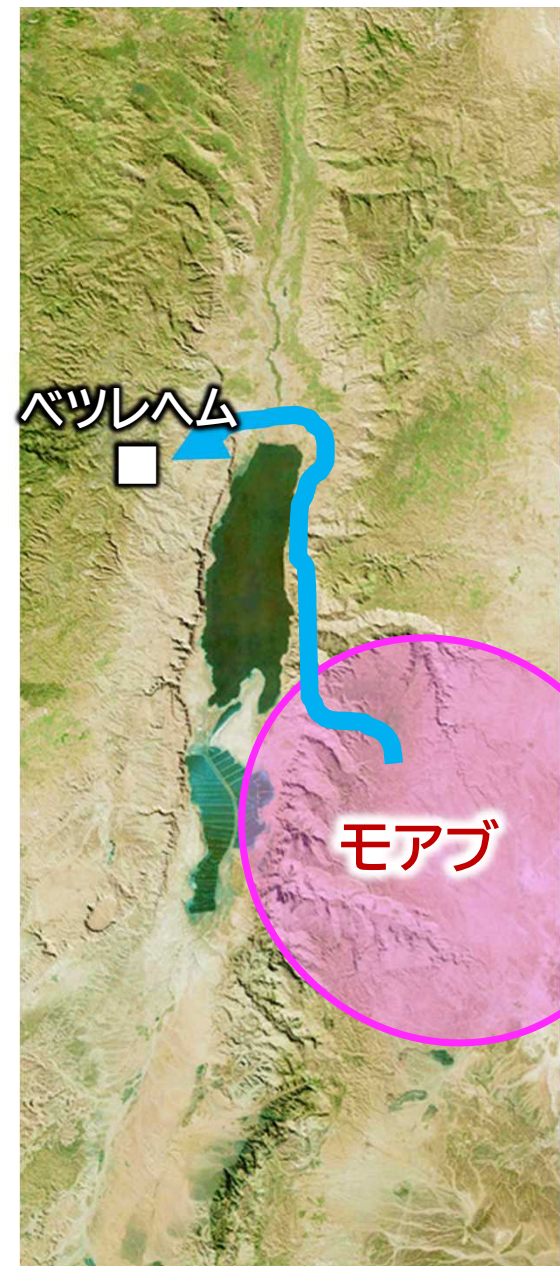
二人は旅をして、ベツレヘムに着いた。彼女たちがベツレヘムに着くと、町中が二人のことで騒ぎ出し、女たちは「まあ、ナオミではありませんか」と言った。

ナオミは彼女たちに言った。「私を**ナオミ***と呼ばないで、**マラ***と呼んでください。全能者が私を大きな苦しみにあわせたのですから。

*ナオミ ➡ “喜び、歓喜” *マラ ➡ “苦い”

■しかし主は、苦い水を甘く変えられる方。(出15:23)

➡ 決して失われてはいない、ナオミの信仰



【ナオミの嘆き】 ルツ1:21~22

私は出て行くときは満ち足りていましたが、【主】は私を素手で帰されました。どうして私をナオミと呼ぶのですか。【主】が私を卑しくし、全能者が私を辛い目にあわせられた*というのに。」

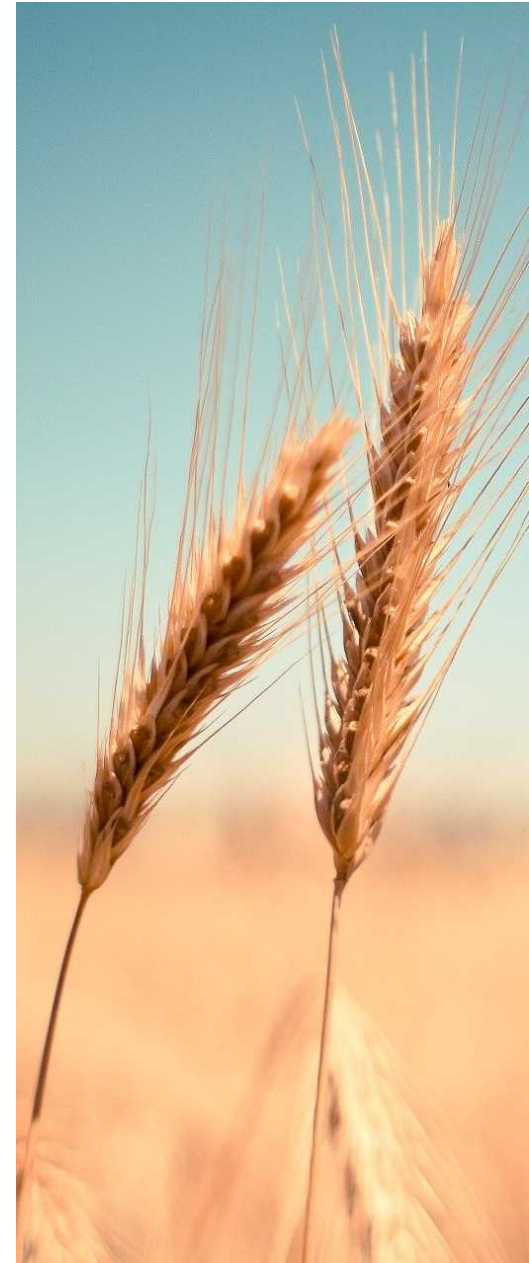
こうして、ナオミは帰って来た。モアブの野から戻った嫁、モアブの女ルツと一緒にであった。ベツレヘムに着いたのは、大麦の刈り入れが始まったころ*であった。

*一歩進んで求められるのは、神の理由を聴くこと

➡戒めを受け取り、悔い改めたら、ことは動き出す。

*ちょうど出エジプトを記念する「過越祭」の頃。

…雨期の終わり、4月頃。





Ⅱ. ベツレヘムでの落ち穂拾い ルツ記2章

ヘロディウムから臨むベツレヘム

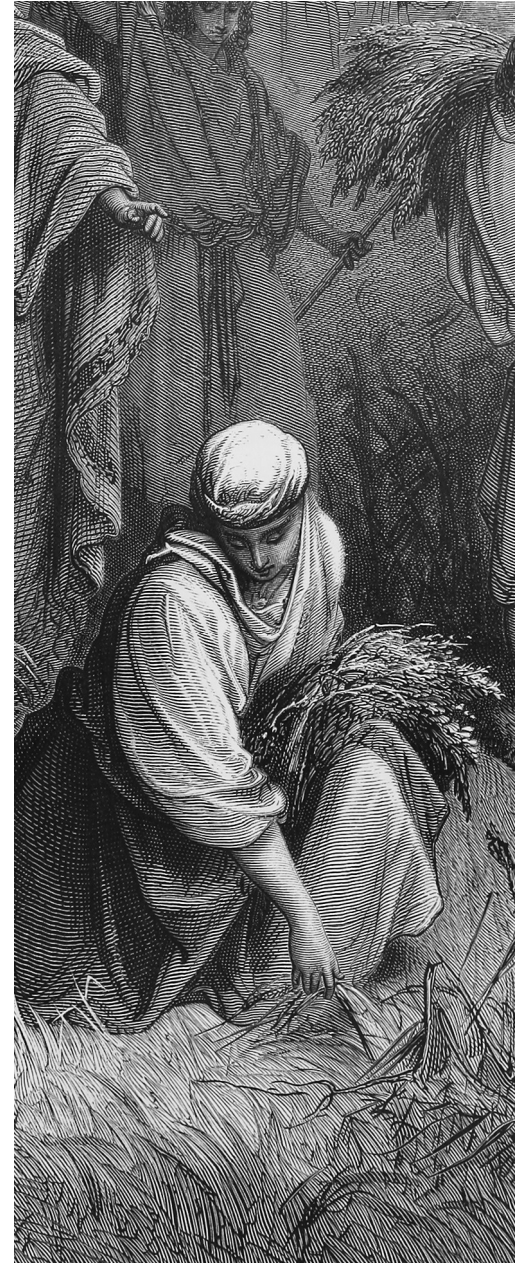
【落ち穂拾い】 ルツ2:1~2

さて、ナオミには、夫エリメレクの一族に属する一人の有力な親戚がいた。その人の名は**ボアズ***であった。

モアブの女ルツはナオミに言った。「畑に行かせてください。そして、親切にしてくれる人のうしろで**落ち穂**を拾い集めさせてください。」ナオミは「娘よ、行っておいで」と言った。

***ボアズ** ➡ “素早い” ヤコブのようなイメージ？

***落ち穂拾い**は、律法の生活保護規定(レビ19:9~10他)



【信仰者の家族】 ルツ2:3~4

ルツは出かけて行って、刈り入れをする人たちの後について畑で落ち穂を拾い集めた。それは、**はからずも***エリメレクの一族に属するボアズの畑であった。

ちょうどそのとき*、ボアズがベツレヘムからやって来て、刈る人たちに言った。「**【主】**があなたがたとともにおられますように。」彼らは、「**【主】**があなたを祝福されますように」と答えた。

* 神のタイミングで、ことは起きる。

* 日常的に主が讃えられるボアズの家。

僕たちとも主の兄弟として対等に接するボアズ。

士師の時代には希有!



【ボアズの目にとまったルツ】 ルツ2:5~7

ボアズは、刈る人たちの世話をしている若い者に言った。「あれはだれの娘か。」

刈る人たちの世話をしている若い者は答えた。「あれは、ナオミと一緒にモアブの野から戻って来たモアブの娘です。」

彼女は『刈る人たちの後について、束のところで落ち穂を拾い集めさせてください』と言いました。ここに来て、朝から今までほとんど家で休みもせず、ずっと立ち働いています。」

■ 仕事のできる即断実行の人、ボアズは、働き者ルツの姿を見過ごさなかった。



【ボアズの気遣い】 ルツ2:8~10

ボアズはルツに言った。「娘さん、よく聞きなさい。ほかの畑に落ち穂を拾いに行ってははいけません。ここから移ってもいけません。私のところの若い女たちのそばを離れず、ここにいなさい。

刈り取っている畑を見つけたら、彼女たちの後について行きなさい。私は若い者たちに、あなたの邪魔をしてはならない、と命じておきました。喉が渴いたら、水がめのところに行つて、若い者たちが汲んだ水を飲みなさい。」

彼女は顔を伏せ、地面にひれ伏して彼に言った。「どうして私に親切にし、気遣ってくださるのですか。私はよそ者ですのに。」



【信仰者ボアズ】 ルツ2:11～13

ボアズは答えた。「あなたの夫が亡くなってから、あなたが姑にしたこと、それに自分の父母や生まれ故郷を離れて、これまで知らなかった民のところに来たことについて、私は詳しく話を聞いています。

【主】があなたのしたことに報いてくださるように。あなたがその翼の下に身を避けようとして来たイスラエルの神、【主】から、豊かな報いがあるように。」

彼女は言った。「ご主人様、私はあなたのご好意を得たいと存じます。あなたは私を慰め、このはしための心に語りかけてくださいました。私はあなたのはしための一人にも及びませんのに。」

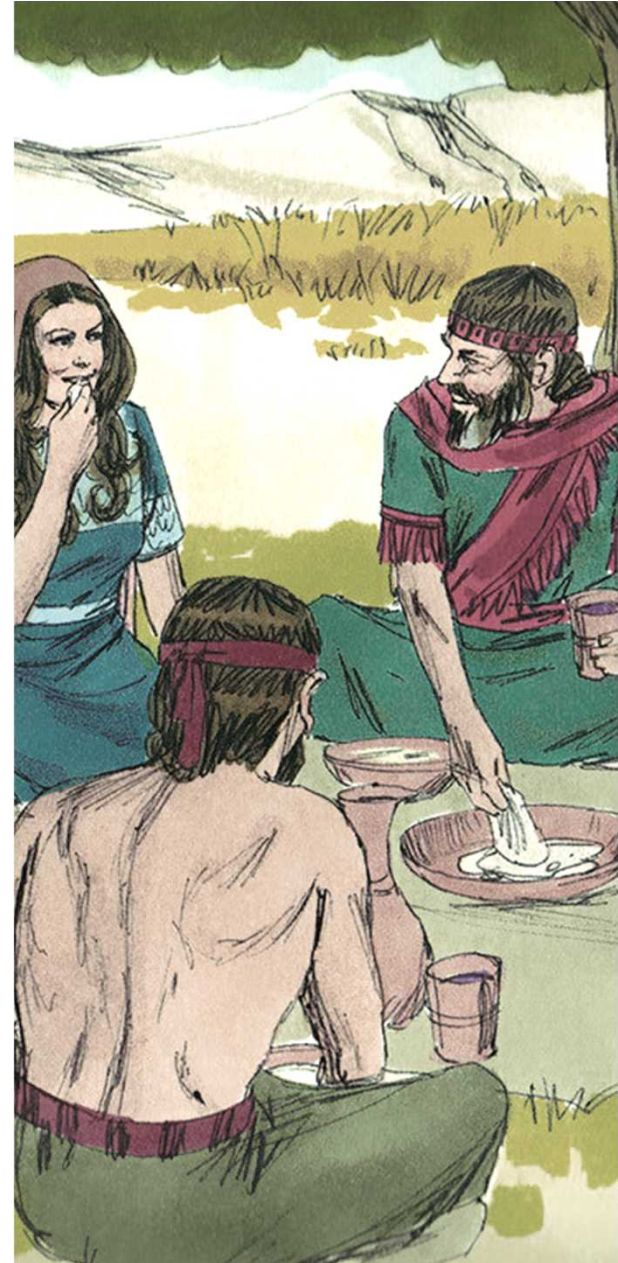


【ボアズの親切】 ルツ2:14

食事の時、ボアズはルツに言った。「ここに来て、このパンを食べ、あなたのパン切れを酢に浸しなさい。」彼女が刈る人たちのそばに座ったので、彼は炒り麦を彼女に取ってやった。彼女はそれを食べ、十分食べて、余りを残しておいた。

彼女が落ち穂を拾い集めようとして立ち上がると、ボアズは若い者たちに命じた。「彼女には束の間でも落ち穂を拾い集めさせなさい。彼女にみじめな思いをさせてはならない。それだけでなく、彼女のために束からわざと穂を抜き落として、拾い集めさせなさい。彼女を叱ってはいけない。」

こうして、ルツは夕方まで畑で落ち穂を拾い集めた。集めたものを打つと、大麦一エパ(23ℓ)ほどであった。



【度重なる幸運】 ルツ2:18~19

彼女はそれを背負って町に行き、集めたものを姑に見せた。また、先に十分に食べたうえで残しておいたものを取り出して、姑に渡した。

姑は彼女に言った。「今日、どこで落ち穂を拾い集めたのですか。どこで働いたのですか。あなたに目を留めてくださった方に祝福がありますように。」

- 山地のベツレヘムに平地はない。段々畑での落ち穂拾いには、大変な労力が求められただろう。



ベツレヘムの段々畑

【度重なる幸運】 ルツ2:18～20

彼女は姑に、だれのところで働いてきたかを告げた。「今日、私はボアズという名の人のもとで働きました。」ナオミは嫁に言った。「生きている者にも、死んだ者にも、御恵みを惜しまない【主】が、その方を祝福されますように。」ナオミは、また言った。「その方は私たちの近親の者で、しかも、買い戻しの権利のある親類*の一人です。」

* 神の相続地が一族から離れないための規定。

レビ記25:25 「もしあなたの兄弟が落ちぶれて、その所有地を売ったときは、買い戻しの権利のある近親者が来て、兄弟の売ったものを買い戻さなければならない。



【恵まれた日々】 ルツ2:21~23

モアブの女ルツは言った。「その方はまた、『私のところの刈り入れが全部終わるまで、うちの若い者たちのそばについていなさい』と言われました。」

ナオミは嫁のルツに言った。「娘よ、それは良かった。あの方のところの若い女たちと一緒に畑に出られるのですから。ほかの畑でいじめられなくてすみませう。」

それで、ルツはボアズのところの若い女たちから離れないで、**大麦の刈り入れと小麦の刈り入れが終わるまで*** 落ち穂を拾い集めた。こうして、彼女は姑と暮らした。

*** 律法の定める、過越祭から五旬祭までの頃。**





Ⅲ. まとめと適用

主の約束に生きる者となろう

モアブの野

【ボアズの信仰と親切心の背景】

「マタイ1:5 サルマがラハブによってボアズを生み、
ボアズがルツによってオベデを生み、」

- 聖書の系図は、サルマ ➡ ボアズ ➡ オベド ➡ エッサイと、
士師の時代の信仰者の系譜を4代でつなぐ。(ルツ4:3～、I 歴2:12～)
- ボアズの母は、エリコの遊女ラハブ。
➡ 約束の地で最初に救われた異邦人。
- ボアズは、両親の信仰を確かに受け継いでいた。
➡ モアブ人ルツに、主への確かな信仰を見いだしていた。

【買い戻しの原則と神の民イスラエル】

★レビ記25:23～25

土地は、買い戻しの権利を放棄して売ってはならない。土地はわたしのものである。あなたがたは、わたしのもとに在住している寄留者だからである。…もしあなたの兄弟が落ちぶれて、その所有地を売ったときは、買い戻しの権利のある近親者が来て、兄弟の売ったものを買い戻さなければならない。

- イスラエルは、神の与えた相続地にとどまり続けることを求められた。イスラエルの土地は、神の所有地。**イスラエルは寄留者に過ぎない。**
- 主が与えた律法に従い、神の約束を信じて歩むことが求められた。**ただ神の恵みの約束に生かされている。**それが神の民イスラエル。

【買い戻しの原則と私たちの救い】

- **買い戻しとは、すなわち贖い**。究極の買い戻しが主イエスの十字架。主イエスの血潮によって死と滅びから贖い出された。それが救い。
- 十字架と復活の福音を一度信じた、その救いは二度と失われない。**主イエスによる買い戻しは、一度きり**。完全で永遠のものだから。
- 私たちに約束された地は、来たるべき神の王国。この世とこの人生にあって、**信仰者は寄留者**だと覚えよう。人は、孤立と孤独の中で、一人主と出会わされる。
- 目の前の落ち穂拾いに励んだルツのように、目の前に与えられた**小さな使命に忠実に**従い続ける者でありたいと願う。

【イスラエルも異邦人も変わらない救いの原則】

ルツ1:16 あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です。

- ルツは、イスラエルの神を、自分の主と信じて救われた。
私たちは、十字架と復活のイエスを主と信じて救われる。
➡ 信仰者の人生は、ただ主に信頼することで開かれていく。
- ボアズもナオミも、律法を良く理解し、覚え、従っていた。
御言葉を慕い求め、喜んで学び、主を深く知っていこう。
- ルツのように、今できる小さなことに、持てる力を注いでいこう。
ボアズの家のように、いつでも主を覚え、ほめたたえて歩むなら、
主は必ず、最適のタイミングで、最善をなしてくださる。

「天のお父さま。わたしは、み子イエス・キリストが、

①わたしの罪(つみ)を贖(あがなう)うために十字架で死に、

②墓(はか)に葬(ほうむ)られ、

③三日目に復活(ふっかつ)したことを信じます。

ルツもナオミも、ただ主を信頼(しんらい)して恵(めぐ)みをえました。

福音(ふくいん)を信じたわたしを、主が買(か)い戻(もど)してくださいました。わたしは、永遠(えいえん)に主よ、あなたのものです。

世にあっては 寄留者(きりゆうしゃ)の苦難(くなん)がありますが、

主の力によって、希望(きぼう)と平安(へいあん)を得(え)ていくことができますように。

主イエス・キリストのみ名によって祈ります。 アーメン」